

シュンギクの作りかた

札幌市農業センター

林

繁

シュンギクは、ハウレンソウ、カリタイナ、ミツバ、ダイコンなどとともに都市近郊で作られる主要な軟弱野菜のひとつにあげられる。

原産地は地中海沿岸といわれており、本邦には400～500年前、中国から入ったとの説が強く、古書には、こうらいぎくと記されている。しかし、ルソンギク、ローマーギク、オランダギクとの呼び名もあるところから、南方を經由したものとも考えられる。欧米では専ら花壇用として観賞されているとのことで、これを食用に供するのは、中国、日本、朝鮮、インド、フィリピンなどの東洋人に限られているようである。

わが国では、伝来の早かった九州や関西地方に作付が多かったが、人の交流と食生活の多様化によって、消費も全国的に普及をみるに至った。特有の香味は、よく日本人の好みであって、なべ物には欠かせない野菜であるほか、したし物、あえ物、てんぷらに格好であるところから、現在では周年需要があるようになった。

1 市況

野菜は作る前に売る勉強といわれる。中でも軟

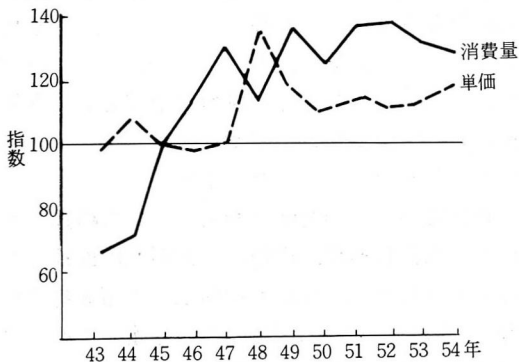


図1 昭和45年対比1人当たり消費量と単価の推移
札幌中央卸売市場調べ

弱ものは、ことのほか相場の変動が激しく、無計画な栽培をすると、出荷に値しない安値にありこともしばしばある。

図1は、札幌市の人口1人当たりの年間消費量と、物価指数で補正した単価の推移を、昭和45年対比で示したものである。図からもわかるように、昭和47年までは消費も急激に伸び、価格は48年をピークにして、その後は消費量、価格とも横ばいの状況にある。すなわちこの図からみる限り、シュンギクは成長野菜というよりも、安定野菜という感じを受ける。

図2は、昭和54年の札幌中央卸売市場における、月別入荷量と月平均単価を示したものである。年間総入荷量484t、その内道内入荷量は183tであるが、70%は札幌市内から出荷されており、近郊野菜としての特色がうかがえる。道内ものが関与しているのは、4～11月の8カ月であるが、5月・11月の占有割合は約半量であることから、今後は若干の作期前進と出荷期の延長を考慮のべきであろう。

図3に、物価指数で補正した最近10年間の月別

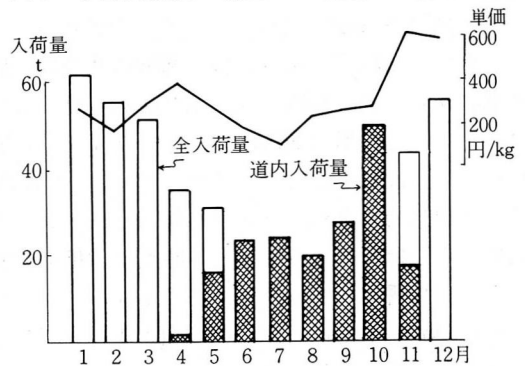


図2 昭和54年月別入荷量と平均単価
札幌市中央卸売市場

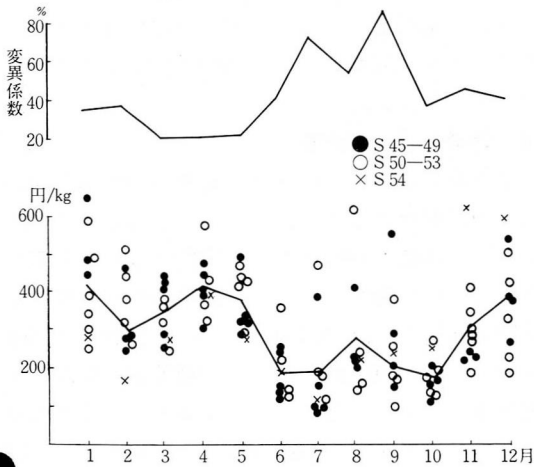


図3 月別単価と10年平均単価及び変異係数
札幌中央卸売市場

平均単価を示し、その平均値を実線で結んだ。年によって価格差が大きく、変異係数からもわかるように7・8・9月の変動が特に大きい。

府県の入荷量で占められる12月から3月までを除いて考えると、4・5月は高値安定、11月も比較的価格がよい。作りやすい6・7・10月は安値、高温で病害の多発する8月出しは品薄高値を示している。以上のことを総合して判断すると、ハウスやトンネルを利用した、早春と晩秋どり栽培、作りにくい8月どりが有利のようである。しかし、シュンギクのように生育期間の短い軟弱野菜は、投機的にならず経営規模と労力を考えながら、コストダウンに作ることが堅実である。

また、夏野菜の本州移出が脚光を浴びている昨今、シュンギクも、その1品目として今後検討に値するものとする。

2 生育条件

有機物の多い壤土が好適であるが、土壌に対する適応性は広く、有機物や石灰を入れて改良すると大抵の土地で作ることができる。乾燥すると生育が著しく悪くなるので、堆肥を十分入れて保水力を高めなければならないし、乾燥期にはかん水設備も必要とする。

病害虫は比較的少なく作りやすい野菜で、耐暑、耐寒性も強いが、高温では茎伸び抽台が進み病害にもかかりやすく、生育適温は15~20℃で冷涼な

表1 シュンギクの発芽温度(稲川氏ら)

温度(℃)	10	15	20	25	30	35	60
発芽率(%)	18	42	43	26	24	15	0
発芽日数(日)	3.7	5.0	3.4	3.3	3.4	3.5	—

気候を好む。低温に対してはハウレンソウやタイナより弱く、良品のものをとるには5℃以下とならないように注意しなければならない。

種子は、最低10℃で発芽するけれども発芽率が悪く、15~20℃が適温、35℃以上では著しく発芽率が低下する。

3 品種

ほかの野菜に比べて分化が遅れており、葉形や生育相によって系統が分けられている程度である。私たちが行った比較試験の結果でも、かなり雑ばくなものが多く、今後の育成改良を期待したい。大別すると、葉の欠刻から大葉、中葉、小葉の3系統があげられる。

(1) 大葉種…中国系で葉が大きく、丸味を帯びて欠刻は浅い。耐寒性やや劣るが抽台遅く多収で、一名おたふくと呼ばれている。栽培は関西や九州に限られているようで、関東以北では好まれない。

(2) 中葉種…大葉種より葉の欠刻深く、早生、多収、耐暑耐寒性とも強い。全国的に広く作られているが、中葉系でも系統により葉形や生育相も異なっている。

ア、株立ち型=直立性で早生、分枝数多く再生力も強い。つみとり、一斉刈りとり収穫に適している。

イ、株張り型=関西で改良されたもので、株立ち型に比べ葉色濃く株張りが特によい。葉厚く欠刻は粗い。生育抽台ともに遅いが多収である。根付、または刈りとり一斉収かくに適するが、つみとりには向かない。札幌では一般につみとり収かくので、品薄時期以外に作ることは一考を要するものと思う。

(3) 小葉種、葉は欠刻深く細かい。直立性で抽台早く収量が少ないので、現在ほとんど作られていない。

札幌市場では、中葉系でも葉が厚く欠刻の浅いものが好まれている。これを中大葉系と分けている人もいるが、このような系統で、株立ち、また

は中間型で、そろいのよいものを選ぶようにする。

4 作 型

ハウス無加温栽培では3月中、下旬、トンネル栽培では、3月下旬から4月上旬にかけては種されるが、この時期は低温なので収かくまで45~50日を要する。ハウス栽培でトマトやキュウリの前作として入れる場合は、一斉刈りとり収かくとなるが、後作を急がないときは2~3回のつみとりを行う。4月下旬から8月中旬まきまでは、普通露地栽培を行うが、休閑ハウスを利用した雨よけ栽培もよい。9月に入ると、再びトンネルを利用した保護栽培となり、11月上旬ころまで出荷される。

5 整地からは種まで

整地や施肥は、カリタイナなど他の軟弱野菜に準じて行う。シュンギクは短期作物であることから、粗放に扱われやすいけれども、乾燥に弱いので有機物の施用と、ある程度の深耕は必要である。

施肥は土壌本来の性質、残存養分などによって異なるが、1 a 当たり窒素・リン酸・加里・各1~1.5 kg と石灰を施用するのが標準である。野菜専作地では、近年要素の偏重、過剰がめだち、生育を阻害している例が多い。札幌の野菜畑では、リン酸や加里過剰、苦土不足、または苦土加里比の低下がめだっている。正しくは土壌分析の結果によって施肥量を定めるべきであろうが、いかなる場合でも過肥は禁物である。

うね幅は作型によっても異なり、135~150 cm のベッドに20~25 cm のまきみぞを作るが、露地栽培では45~50 cm の平うね作りも多い。

種子1 dl の粒数は28,000~30,000で、38 g 内外である。新しい種子は2カ月くらいの休眠期間があるので、採種直後のものは使用しないようにする。

従来シュンギクの種子は休眠が深いのと、タンソ病の保菌のあることから前年の種子を使うようにいわれているが、休眠期間の過ぎているものであれば、種子消毒を完全に行うことにより新しいものでも使用することができ発芽率も変わらない。また、新種子の休眠打破には、低温処理やチオ尿素0.2%液浸漬処理が有効と報告されている。

は種量は、一般に1 a 当たり1.5~1.8 l くらいとされている。しかし筆者らの経験によると、

精選のよい種子なら5 dl 内外、株張り系ではさらに少ない量で足りるように思う。浸漬吸水させてまくことも、発芽をよくする一手段でもあるのでおすすめしたい。

6 管理と収かく調整

発芽後2週間くらい経ったとき、一度除草をかねて中耕を行うとよい。密生しているところは、このときに間引を行なうか、密度は収かく方法や草姿によって異なる。タンソ病の発生しやすい高温期の栽培では、生育初期から5~7日おきに防除を行う。草丈20 cm くらいが収穫適期。収かく方法はさきにも述べたように、つみとりと刈り取りによるものがある。高温期には朝夕の涼しい時間に収かくし、取扱いに十分注意しなければ著しく品いたみをする。札幌では無結束2 kg、ミカンの古箱を半切にしたものを用いて出荷されている。生産者にとっては大変ありがたいことで、今後このような荷姿で出荷を続けたいものである。

7 病 害 虫

病害ではタンソ病が最も恐ろしい。害虫はヨトウガ・ネキリムシ・アブラムシの加害があり、防除は努めて発生初期に行い被害拡大を防ぐ。

タンソ病は6~9月の高温期に発生が多く、葉・葉柄・茎を侵す。葉には最初黄白色の小さな斑点ができ、次第に大きくなって円形や不規則な暗褐色な病斑を作り、後に黒変する。葉柄や茎に発生すると楕円形の病斑となり、そこからしおれたり折れやすくなったりする。甚だしいときは、急激に広がり畑全体が立枯状になることもあるが、一般には部分的に発生するが多い。

対策としては、連作をさけ、畑の排水をよくし、密植しないようにして生育環境をよくすることが大切である。種子に付いた病菌は1年くらいで死滅するので古種子を使用するとよい。種子消毒は50℃20分の温湯消毒による効果が高いといわれている。薬剤による防除は早期に行ない、収かく近くの散布を避けなければならないことは前述のとおりである。